

西行考 その三

―『山家集』上の部の秋冬の詠に見られる西行の一側面―

山下 忍

はじめに

私の「西行考」も、この論述をもって「その三」となる。

「その一」のテーマは、「西行考―その出離と生と死に係わる一考察―」であった。

この論において、私は、西行の脱俗と、その生死観について、私なりの思いを述べた。

平成十二年三月発行の「宮崎女子短期大学紀要―第二十六号―」に掲載されたものであったが、この論文は、幸いにして、学術文献刊行会が発行する『国文学年次別論文集』の平成十二年版中世代分冊に収録していただくことになった。

嬉しく、有難いこと、この上なしである。同時に、このことは、西行を、今後とも全力で研究していけとのご鞭撻でもあると、覚悟を新たにしている。

「西行考 その二」においては、「小説家を論ずるには、その著作の小説を精読するに如くはなく、画家ならば、その人の描いた絵そのものを鑑賞することで、その絵画きの内面がしつかりと浮かびあがる。西行をよくよく分からせてくれるものは、結局は、西行の歌そのものののだ。」との強い思いで、『山家集』上の部の春夏の詠を論じ、西行の一側面を明らかにすべく努めた。

今回の「西行考 その三」は、「その二」に次いで、『山家集』上の部の、秋冬の詠を私なりに解釈、鑑賞し、そこから西行の新たな一側面に迫ってみたいと試みたものである。

随分と荒っぽい把握、鑑賞となった部分も多々あるなど思っているが、心広い西行のことであるから、そんな見方、考え方も面白いと、苦笑しながら許してもらえないのではないかと、勝手に諒承を得ている。

今一つ。

今回の論を書き始める時、どうした訳だか、百五歳で大往生なさった画家小倉遊亀氏が、百歳時に詠まれた、

のどかなり願いなき身の初詣

の句がふつと浮かんで、それが、なかなか脳裏から去らなかつた。

西行は、遊亀氏の年齢よりはるか早くに世を去ったが、その生きざま、大往生ぶりは、まさに同一ではなかったかと、そんな思いが胸中に強くあつたのかもしれない。

人生の折々に、生きとし生けるものであるが故に、避けようもない苦難、苦渋が、とめどなくあつたとしても、力を尽くして生き抜く中で、遂に到達する安住の世界。その安らかさにおいて、人生の

達人と称している人々には、歴とした共通点がある。そんな当たり前のことを、新鮮な思いで噛みしめてみたりもしている。

ところで、今回も、西行の秋冬の歌を、一首、また一首と解釈し鑑賞するたびに、渡辺保氏が、『西行山家集全注解』で記しておいで解釈等を拝読し、教えを受けることしばしばであった。

取りあげた歌の頭に付した「歌番号」も、「その二」の論文の場合同様、渡辺氏の著に施されているものを使用させていただいた。

このことも記して、渡辺保氏に、改めて深甚の謝意を表する。

第一章 『山家集』上・秋の歌

286 秋立つと人は告げねど知られけり

み山のすその風のけしきに

「秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」の名歌において、藤原敏行が用いている「風の音にぞおどろかれぬる」の表現には、言いようもないさわやかさがある。

それに負けず劣らずの味わいを持つのが、この歌中の「風のけしき」であろう。

「風」は、どんな言葉ともよく響き合う。「風の音」、「風のざわめき」、そして、「風の便り」。

だが、この歌の中の「風のけしき」は、響きのよさ、溶け込みのよさだけで歌を引き立てているわけではない。

山里に起居する身であってみれば、秋立つときに至っても、わざわざ誰かが山居を尋ねてそのことを告げてくれるわけではない。万

山紅葉すれば、両の目で秋の深まりをしつかりと見つめることが出来るが、夏から秋への微かな時の移動を、その始めにおいてそっと教えてくれるのは、やはり「風」である。

西行もまた、「風のけしき」によって秋の到来を心得たのである。ところで、「風のけしき」の「けしき」は、単なる「様子」ではない。孤独を求めている日々なるが故に、かえって時には、激しく人恋しさを抱かせる「けしき」であり、かつて、季節の変わり目ごとに華やかな催しの場に身を置いた思い出をも満載している「けしき」である。

俗塵のにぎにぎしさとは縁遠いところに身を置き、それ故にふとみ山のすその風のけしきに自然の変異を覚え、一人居ることの感覚こそが鋭く生みなすものによって、ささやかにしておだやかな幸せを感じとる。

この歌には、その種のさりげないものを、大きく抱きとる西行の姿がある。

289 急ぎ起きて庭の小草の露踏まむ

やさしき数に人や思ふと

この歌を目にすると、われもまた「やさしき数」の一員たり得たらと思う。

「七夕」と題する歌の一首であってみれば、早朝、庭の小草の群に分け入り、露を踏みしく行為をとるというのではあるまい。

格別に露が多く降りている箇所を目を遣り、そば近くに寄るとそと手をさしのべて、くぼめた手の平に清く澄んだ小豆の二、三粒ほどの露を採る。いたわりながら縁側に運んだ白玉は、硯の池にそつ

と移し、それでもつてゆるやかに墨をすり、上質の短冊に、七夕への手向けの歌を瞬時瞑想の後に認める。

そうした行為、姿を、「人」はきつと「やさしき」者と思つてくれるに違いないというのである。

「人」は、「世間の人々」ともとれるし、特定の「ある個人」ともとることができる。

私は、後者の説を採りたい。

願いをこめて七夕の歌を記すのに、汲み置きの水を用いて墨をするのと、草群に宿る白露を集めてこれを用いるのでは、その趣きに格段の相違がある。

いつもいつも優雅にふるまっていたは生きていけぬが、せめて、四季の折々に、はじめをつけるがごとくに情趣を解した言動をとる。そうした事を、わが胸中の人は、きつと喜んでくれるに違いないと、西行は思ふのである。

198 折らで行く袖にも露ぞこぼれける

萩の葉しげき野辺のほそみち

やれ肩が触れた、爪先を踏んづけたと、まことに些細なことで大きな不幸が生じてしまう昨今である。

そうしたささくれだった現世にあつては、「折らで行く」というさりげない表現にも、ほつと息のつける安らぎを覚える。

野辺のほそみちには、左右から重く垂れた萩の葉が寄せている。そうした自然満杯の世界を、西行は、時に身をよじり、時に横歩きして抜けていく。ゆるゆるとした散策であり、足まかせの自然探索であつてみれば、そんな行為にも何の無理も生じない。

それでも、つと開けた場所に至つて、わが両袖に目を遣ると、したたるばかりに袖は露に濡れている。

それを眺めて、今日はこれほどに萩と露の歓迎を受けたかと、西行は感慨に浸るのである。

昔も今も、人の自然を愛する思いに何の変わりようもない。

しかし、こうした歌を、静かにゆつくりと声を発して口にし、くり返し朗読していると、日本人もまた宝とすべき本物の自然から、いつか縁遠いところに身を置いてしまったと、悔いにも似た嘆きが湧いてくる。

302 分けて入る庭しもやがて野辺なれば

萩のさかりをわがものに見る

萩満開の姿を味わわんとして庭に出ようとする。だが、庭に降りるものもないのである。美しい萩の群れは縁側を覆うばかりに茂っているし、踏み分けて、いくらかなりと進めば、庭はそのまま野辺となる。

うらやましい限りである。

狭い日本を、小さく小さく区切つて、より狭つくるしく生きていく今日の日本人からは、はるかに隔たった大和人の姿がここにある。

「わがものに見る」は、現代の日本人においては、その文字面通りに、「己れのもの」、「わが一人だけのもの」として、見、独占することである。

西行の「わがものに見る」は、その意味するところが本質的に異なる。萩のさかりを、誰に邪魔されるでもなく、こころゆくまで味わうのだが、それは、一人占めという狭つくるしき、心の小ささか

ら生ずるものではない。

西行は、いつも心を広げている。吉野の花を見るにも、秋の女郎花に目をやるにしても、ただ一人しての観賞を大きな幸せと感じているが、一方、その場に誰かが居合わせることを少しも厭わない。一人で居るもよし、他人と共にあるもまたよしなのである。

心広く、心大きく生きるといふのは、本来がそうした姿のものである。

薬師寺の高田好胤師が、生前、『心』なる著を世に出し、「心、廣く廣く、もつと廣く」と、ひたすらに世人に訴えたのも、もともと日本人にはそうした生き方があったのに、むざむざとこれを捨て去った現況を嘆き、あるべき姿の復活を願うての切なる行動ではなかったかと思われる。

304 茂りゆきし原の下草尾花出でて

招くは誰を慕ふなるらむ

すすきの原を目にすると、ああ、きらきらと穂波輝くこの季節になったかと思う。田舎の地に住まっていると、四季折々の自然の風物に何かと心慰められる。幸せなことだ。

しかし、それでも、「茂りゆきし原の下草」の中から、たまたま伸び出た尾花を目にして、あのすすきの穂は、一体誰を招き慕っているのであらうかと、殊更に思いを寄せることはない。

よく咲いた尾花は、いくらか頭を垂れる。その姿は、なるほど誰かを招く様子に見てとれる。それでも、野辺のどこにでもあるこの種の状況で、「招くは誰を」と、慕う姿を想起するには、西行自身に慕う心がなければならぬ。

私は、若くして、地位も榮譽も、そして、家族をも捨てた西行は、それ故にこそ、絶対的に捨て去ることの出来ないものに生涯執着し続けたのではないかと思っている。

それは、西行を考える時、常に胸中に湧く思いである。そして、何もかもを捨て得る行為は、決して手放すことのない確固たる何物かを所有したときのみ実践に移し得るのだと思っている。

自然の一風景を擬人化して歌いあげたこの歌にも、西行の、あるものを慕い続ける激しさが、さりげなく貫かれている。

321 おぼつかな秋はいかなるゆゑのあれば

すずろに物のかなしかるらむ

一体どんなわけがあつて、秋はこうも心を締めつけるのか。何となく、やたらに悲しい。悲しいがしかし、その悲しみを生みなすものが何なのか、どうもよくは分からないのだ。

秋が、木立の中の微風のもとで、あるいはまた、薄雲に覆われた月の光のもとで、人を悲しみに誘うのは、今にあつても昔と変わらぬ姿ではある。

しかし、現代の私たちは、西行がこの歌で「おぼつかな」と表現し、「すずろに」と述べた「かなし」を、どんどん遠く離れたところに押しやっているように思えてならない。

西行を始めとして、当代の人々は、秋という季節が醸し出すものを、よくよく承知していた。風そのものの音、風にゆれる木々の木の葉が生みなす音、黄味をおびてきた草原の香り、川面に伸びた山もみじの枝の揺らぎ、それら全てから、かつての日本人は、秋の味わいをこころゆくまで己れのものとし、秋という季節のかなしみを、

しつかりと心得ていたのだ。しかもそれは、当代の人々の共通の悲しみであったが故に、敢えて西行は、「おぼつかない」と言い、「ずるに物のかなしかるらむ」と表現するのである。

その種のいわば「婉曲」、「ゆとり」が、昨今の日本から目に見えて消えてゆく。

世知辛い社会の中で、汚濁した悲しみが次から次に生まれ、それら之余りも膨大なるがゆえに、消してはならぬ「自然のかなしみの情」が、逆に遠くに去っていく。

おだやかに歌を味わいながらも、ますます顕著となるその現実が何とも悲しい。

329 花をこそ野辺のものは見に来つれ

暮るれば虫の音をも聞きけり

欲張りにも様々あつて。

食うに足りる金を疾うに手にして、それでも強く不足を覚えて、汚らしい金儲けを試みたり。

その種の欲張りとは比べた時、「比べるのがどいおかしな話だが」この歌の世界の何とすがすがしく、さわやかなことか。

桔梗か女郎花か、あるいは一面の尾花の群れか、ともかく秋の野辺に、そぞろ歩きの花見としゃれこんだ。

飲み物、食い物持参の華やかにして賑やかな春の花見もよいが、寥々たる秋の野辺を、楚々とした花々を求めて、ゆるやかに歩を運び、歩を休めるのも乙なものである。

ふと気がつくとき既に夕暮れ。

ああ、大満足の日であつたなと思つているところに、リーンリー

ンとずずやかに鳴く虫の声。

ほう、虫までが興を添えてくれるのかと、西行は限りない幸せを覚えるのである。

350 月ならでさし入るかげのなきままに

暮るるうれしき秋の山里

秋の山里において、ただ一人して日暮れを迎えることの嬉しさを述べている。

深々と、ただひたすらに静まりかえった秋の夕暮れであつたのだろう。その時刻を誰に邪魔されるでもなく、己れ一人して過ごしていく。

出離の後も、京の都においてはもとより、出かける旅の先々においても、結構人々との接触の多かった西行である。それ故に、こうして折につけ一人っきりの沈思黙考の時間を保つことは、かけがえなきものであつたと思われる。

ただ、西行は、多くの場合がそうであるように、ここにおいても、心荒む孤独の中にあるのではない。人間は西行一人だが、西行の横手には皓々たる月の光が射している。月光が親しき友として寄り添っているのである。

月かげを詠んだ西行の歌の一首に、

くまもなき月の光にさそはれて

幾雲居までゆく心ぞも

というのがある。

くまなき月光にさそわれ、それをこの上なく嬉しく有難いことに
思つて、高く高く天空はるかまで誘う光を求めて舞い上つてゆく
というのが歌意となる。

西行にとつて、月光は、心休まる友であると同時に、高きを志向
する上で欠かすことのできない一条の光であつた。

強く思っていることがある。

生きる上で、あれやこれやの支えはいらない。いずれに至ればよ
いかを示す一本の杖、人としてのあるべき姿を照らし出す一筋の明
るく清らかな光があればよい。

西行の歌の群れに接していると、西行は明らかに、そのかけがえ
なき一つのものを手にしていたと思われる。

それ故に、世の乱れに心が揺れ、世俗の心なさに気持ちがゆらぎ
ながらも、結局は、その生涯において、あたふたすることのない姿
勢を貫ぬき通し得たのだと思うのである。

368 うちつけにまた来む秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

葉月十五夜の月を眺めての詠である。

現代の「たちまちに」も、「急なる意」を示すいい言葉だが、同
義の「うちつけに」もその響きからしてなかなかの味を持つ。

昨今、日本語の乱れに心の碎かれることが頻繁であつてみれば、
西行の歌に浸りながら、そのひびき、その意において、何とも言い
ようのない大和ことばに接すると、大仰でなく生きる元気が湧いて
くる。

歌は、美しく輝く十五夜の月を見つめていると、急に命が惜しく

なる、せめて来年のこの夜の月を観るまでは生きながらえたいもの
だと思えてくると言うのである。

しかし、この歌が、本当に述べんとする意は、惜しむ命にあるの
ではあるまい。

人の命のはかなさなど、どこの誰よりも承知している西行である。
ひたすらに思いを寄せた人も、未だ年若くして、疾うにこの世を去つ
ている。脱俗そのものが示すように、西行には、生に執着する思い
はない。

結局、この歌は、西行が、自然界において最も美しいものとする
月を称賛するの詠である。

執着するに足りない生を、ふつと激しくいとおしく思わせるほど
に、夜空の月は美しいというのである。

地平からどつと姿を現わす満月も、中央にかかるあるかなきかの
細い月も、なるほど人に、想い、思索し、息づく元氣を呼び起こす。

390 何事も変わりのみゆく世の中に

同じ影にて澄める月かな

歌意としては、常套的作の代表と言つていいかもしれない。

しかし、西行の西行たる所以の一つは、常套なることを重々承知
の上で、その姿を変に細工することなく表現するこの種の歌にある
と言つてよい。そして、西行が、過去も今も多大の人々に親しまれ
てやまない理由は、この限りなき自然さ、奇を銜うところからは全
く無縁の歌の世界にあるのだ。

世の中が平和であろうとなかろうと、一人間の生涯には、大小様々
の変転がある。禍福はまさに糾える縄であり、毀誉褒貶も程度の強

弱はあっても、人として生きるものの全てに例外なく襲ってくる。

西行七十三年の生涯にあっても、九代に及ぶ帝の登退の波乱の中で、社会の仕組みそのものが大きな変革を生んでいったし、それに揉まれ流される日常生活の中で、息づける身近な人間との関係にあっても、時に軋みを生み、時に無残に裂き碎かれる悲しみもあった。そうした大きく荒々しい激動を、西行は、「何事も変わりのみゆく世の中に」と、ごくごく自然に、結果として、この上なく常套的に述べるのである。そうして、この世で不易不変なるものは、まさに「同じ影にて澄める月」だというのである。

末世の様相を呈していた西行の時代に比べれば、今日の日本は極楽である。しかし、比較としての極楽は、有為転変の減少を示すものではない。一見極楽なるが故に、その状況のもとで生きる者達の胸中には、一層の渇きがあるとも言える。その渇きを癒してくれるものは何か。それは、昔も今も、「同じ影にて澄める月」である。

自然界のものもまた有限であるとは言っても、人間、並びに人間の生みなしたものに比較すれば、それは不変不動の姿を所有する。

「変わりのみゆく世の中」で、「同じ影」なるものにじっと目を遣る。それも、濁世と正反対に位置する天上の「澄める月」に。そこに、漸うにして人としての安らぎが誕生する。

月並みの歌意なるが故に、心安まる歌、それが西行歌であると言つてよい。

442 世の中のうきをも知らずむ月の

かげはわが身のこころこそすれ

己れ自身を厳しく、時に冷酷とっていいほどに自省する人間で

あればあるほど、明るく楽観的な人物でもあるのかなと思うことがある。そして、西行は、その代表者の一人ではないのかと思う。

秋の夜の月を詠んだ西行歌の一首に、

ながむればいなや心の苦しきに

いたくな澄みそ秋の夜の月

というのがある。

眺めていると、いやもう、それだけで心は苦しさを増してくる。だから、秋の夜の月よ、もうそれ以上には美しく澄んでくれるなよ。

清澄なる月を賛美するの歌である。

しかし、この場合、全てのものを映し取る澄みに澄み切った月は、歌聖西行の心をも赤裸々に写し取る。

西行は、美しい月を見つめながら、同時に、己れの胸中の濁りをも、したたかに凝視することになるのである。

したがって、「心の苦しみ」姿は、ただただ眺める名月の美しさが生みなすものではない。天上の月と、人間界の己れとのどうしようもない対比の中から、必然的に生まれ出た苦しみでもあるのだ。

それ故に、「いたくな澄みそ」も、歌が、表面的に示すもの以上に、西行にとって、深刻にして厳しいものとなる。

眺め飽きない月は、どんなに歯ざしりしようと、地上の己れからは手のとどきようのない理想世界の存在なのだ。

それほどの月が、「世の中のうきをも」の歌においては、ぐっとわが身に近きものとなる。

世の辛さ苦しさなどと全く無縁に、皓々と美しく照り輝く月の姿

を見ていると、出離し、俗世を脱して、身心を清らかにせんと修行に修行を重ねているわが身が、その世界と何だか一つのものと化していくように思われる。

脱俗の身にしては、謙虚さを忘れた傲りがありはしないかと、手厳しい批判をしようとすればできなくもない。

しかし、この歌における二者の一体化は、西行の身に宿っている樂觀性が、ポロツと生み落としたものである。

努力の末に、いつか天性のものに昇華させたこの伸びやかさが、西行歌に接する者達に、ほっと大きく息をつかせ、こころ安らぐ世界を与えてくれることになる。

第二章 『山家集』上・冬の歌

540 みちもなし宿はこの葉に埋もれて

まださせさする冬ごもりかな

孤独に徹するでもなく、かといって、世俗に執着するでもなしという、西行の日常の生き方そのものがさりげなく感じとれる歌である。

「みちもなし」の「みち」は、西行が山居から人里に出かけるためのみちであり、また、西行を慕う人々が西行のもとにやって来るためのみちである。その「みち」が、降り敷く落葉によって、すっかり埋もれてしまったというのである。

この身を冬ごもりさせるには、「まだき」ではないかと、降り積もる落葉に恨みごとを言いながら、早々と冬ごもることに、西行は

安堵の感を抱いている。

世間の皆さん、ちよっとお先に冬眠に入りますよと、例えば、邪気の無い子供が、いくらかはしゃぎながら寝具の中に頭からわが身をつっこみもぐり込んでいくのと同じの姿を、私はこの歌から感じ取る。

ごくごく自然に、世俗との縁が切れる「みちもなし」を、西行は得難いことだと思うのである。

「時雨」を歌題とした西行詠に、

おのづからおとする人ぞなかりける

山めぐりする時雨ならでは

というしつとりとした歌があるが、この歌にも、「おとする人」を拒否するのでもなく、しかし、目下友とするのは「山めぐりする時雨」のみと、ただ一人して生きることにならぎを覚える西行の姿が見られる。

人ひとりが往き来する小径が、黄や紅の落葉に深く埋もれて、閑居の世界が、ますますもって静けさを増幅する。その世界に、西行は、心おだやかに身を沈めていく。

多忙をもってよしとする現代社会のわが身も、一年のうちの数日なりと、こうした西行的世界に身を投げ入れれば、少しは心のいだちも柔らぐものをと、ふっと羨望に似た思いが湧いてくる。

553 さまざまに花咲きけりと見し野辺の

同じ色にも霜枯れにける

人の幸、不幸は、一見すると、その量においても程度においても大きな落差があるように見えるが、一生を通過して眺めると、大した違いはない。人は皆、似たような幸、不幸を担い、体験しながらその生涯を閉じていく。

そうしたことが言われもするし、自分の目で見つめてきたところからしても、それが実態であり真実かなと思ったりもする。

西行が、こうして、

野辺には、春夏はもとより、秋においても、色とりどりに花が咲く。しかし、冬を迎え、霜の降りるこの季節ともなれば、一面、そこは枯れがれとした鈍色の世界となる。

と歌いあげると、「行きつく所は皆同じ」と、改めて思いを強くする。

それにしても、西行の歌の、何と淡々としていていることか。

出家の身になったからといって、その歌の世界には、とかく説教を伴いがちな宗教臭さは少しもない。

西行は、両の目が捉え、心が写しとつたものを、努めて技巧を排して述べていく。

西行の歌を、一首また一首と味わっていると、「文学は自然なるべし」、川が高きから低きに流れるごとくに、「文学は限りなく無理なかるべし」と思えてくる。

568 霜さゆる庭の木の葉を踏み分けて

月は見るととふ人もがな

「人もがな」―この私と心が一つとなる友がいてくれると嬉しい。風物に目を遣るにせよ、何事かを語り合うにせよ、心を同じくして見つめ、あるいは、心一つにして言葉をかわし得る友がいれば、どんなに人生は楽しいことか。

「人もがな」の四文字には、美しく人を恋うる思いが色濃く籠められていて、甘酸っぱい味が滲み出る。

山居への小径は、とうに落葉に埋もれて、人の往来も儘ならない。まして、今は、庭一面に厳しく霜の降りている夜である。人の訪れなど望むべくもない。

しかし、寒空のもと、皓々と月の照り渡っている風景を見つめていると、心の奥底から無性に友を求める思いが湧いてくる。

秋の月も、もとよりよいが、寒月も亦、冬のものならではの味があることよと、静かに、ゆつたりと語り合える友がこの場にいたら、どんなによいものかと、西行は、友恋う思いを濃くするのである。身に沁みる寒さの中での月を歌った西行の詠に、

花におく露にやどりしかげよりも

枯野の月はあはれなりけり

の一首がある。

秋の野の花の露に光を映す月よりも、枯野を照らす冬の月には、一層の味わいがあるというのである。

汚れ無きものには、事の大小を問わず、常に大きな感動を覚える西行であつてみれば、夜空に輝く月は、春夏秋冬の何れを問わず、己れの友であり、眺め飽きない存在であつたであらう。

それゆえ、春の夜の朧月も、秋の花の露を照らす月も、そしてま

た、涼を呼ぶ夏の夜の月も、西行にとっては、大事な大事な自然の造物である。

しかし、四季の中の月で、寒さ酷しき冬の月は、観賞する人も数少なく、目を遣つても、多くの場合をそくさとした瞬時のものとなる。

そうすると、西行は、月は、「枯野の月」が何よりだぞと、殊更に主張したくなるのだ。

西行には、弱きもの、不自由なるものに味方し、これをわが身でもって庇う姿勢が常時ある。

皓々たる秋の満月なら、ただ一人して味わつて大満足。だけど、「枯野の月」は、願わくば心通い合う友と一緒に眺めたい。無言で見つめ、時おり襟元をかき合わせながら、「寒月もまた佳し」と、こちらもぼつり、相手もぼつりと口にする。

もうよかろうと、観月に終止符を打ち、いろりの火を強くして、四つの手の平を寄せ合つて暖をとり、そこで、改めて、深く埋もれたみち無きみちを踏み分けて、よくぞやつてきてくれたと、心から礼を言う。何の何の、寒月は、山居の友を尋ねて枯野の中で味わうのが最高のもの、お互いにいい一夜であつたと、友も言う。

西行は、こうしたぬくもりの世界を、折にふれて想起する。

ただ、多くの場合、それは、西行の胸を切なく占める願望であつた。

594 いかなれば雪しく野辺の笹の下を

分けゆく水のこほらざるらむ

西行は、積もる雪の中で、笹原の下を浅く下つてゆく川水を見つ

めながら、「ああ、氷ることもなく流れていく」と、子供が、鳥や虫の動作を飽きることなく眺めるように、感嘆の念を抱き続けている。

何故氷らないのだと、その理を問う訳ではない。大人の疑念とは無縁の問いである。

ただ、子供のごとくに見つめながら、自分もまた、「雪しく野辺」にあつても、妙に氷りつくことなく人生を流れていきたいものだとの思いはある。条理なる思いではなく、自ずと胸中を流れ下る思いである。

大の大人が何を今さらと思われるような幼稚な疑問の世界に、西行は、しばしば子供となつて入っていく。

奥深い思索は、子供の無邪気との同居のもとに誕生する。そんな思いを抱かせる一首である。

記している中に、ふつと良寛や一茶の顔が浮かんでくる。

621 とふ人ははつ雪をこそ分けこしか

道とちてけりみ山べの里

どんな人物であろうと、人間である限り、「喜怒哀楽」に縁を切つて生きるのは無理なことだと思われる。

山居にあつて、雪深い毎日ともなれば、人の流れが無くなるのは当然のことと、西行はよくよく分かっているのである。

分かった上で、人間で何と勝手なものかと、西行こそが勝手に憤慨し怒っている。

初雪が降った折には、西行の山居はいかなる趣きを有しているものかと、積もった雪道も何のその、結構人々は訪れてくれたではな

いか。それが、今は何か。雪景色は一向に珍らしいものではなくなり、山居への道は一層の難儀さを持つてくると、誰一人として尋ねる者はない。友人知己を含めて、人間なんてまことに勝手なものだ。

歌の、しつとりと落ちついた調べに照らすと、記した解釈のようにはならないのかもしれない。

初雪の頃には、この山居を訪れてくれる人もあつたが、雪深くなつた今は、み山べの里は、私一人きりの世界である。

このように、さらつととるのが、大方この歌の正しい解釈となるであろう。

しかし、時々はこの種の歌を、西行の人間に対する嘆きの歌とみるのも、許されることではないかと思つてゐる。

小鳥たちや、川や海の魚たちの仲良く群れ集う姿を見ていたり、冬になれば痛々しく枯れ、しかし、春の陽光を浴びると、途端に、美しい新緑の装いを見せる草木の姿を眺めていたりすると、この世で、一番の弱虫、泣き虫、不甲斐なきものは、二本足で偉そうに歩き回っている人間ではないのかと、わが身をも含めて苦笑したくなる。

現に、生老病死の何れの面でも、一番に得手勝手で、事に当たつてあわてふためき、性懲りもなく執念深かつたりするのは人間である。

めずらしいうちは、ちやほやし、飽きてしまえばばいと捨てる。少しばかり事が思うように進まない、途端に泣きわめく。

人間の一人として我乍ら情けなくなる。

人間の、どうしようもない弱さ、情けなさ。その種のものが、西行のこの種の歌には、その根底に苦笑と共に流れている。

たまには、そうしたことも思いながら、西行の世界に身を置いてみる。それもまた、一興かと思うのである。

624 常よりも心細くぞ思ほゆる

旅の空にて年の暮れぬる

「みちのくににて年の暮によめる」との詞書が付いている。

歌聖と称せられるようになった西行の、何と人間臭く、また、正直であることか。

西行は、誰に強要されるでもなく、己れの意志で旅に出た。後に俳聖芭蕉が、西行を偲びつつ、わが願いの儘に旅につぐ旅を行つていったがごとくに、西行は、旅に出たくて、その思いを実行した。

それにもかかわらず、「常よりも心細い」思いに襲われるのである。旅先は「みちのくに」、頃は、「年の暮」という条件も、西行をして、心寂しい思いに至らせたのかもしれない。

それにしても、西行の「心細さ」には、万人に共通する寂しさがある。

高校生の頃のことだから、もう半世紀前、五十年前も前のことになるが、三木清の『人生論ノート』にひどく魅かれた時期がある。

まさに、むさぼるごとくに、「孤独について」を読み、「死について」を読み、「読書について」を読んだ。

そうした中で、特に心魅かれたのが、「旅について」の一章であった。五十年前も昔のことになると、三木清が記していた文言通りにその文章が、今も胸中にあるわけではない。しかし、三木清が、旅と

は、その行き先、あるいは、期間の長短を問わず、寂しいものだ、人を孤独の世界に引き込むものだ、そして、その孤独感、寂しさこそが、思索を生み、人を高きに導いていくと述べていたことは、今日もなお、強く胸中に焼きついている。

そのことと思ひ合わせると、なるほど、旅は、「常よりも心細くぞ思ほゆる」ものなのだ。人を寂しくさせ、自ずと頭を低く垂れさせて沈思する中で、人は旅から様々なものを取得し、肝要なものを血となし、肉となしていくものなのだ。

西行の、素直さ、正直さ、人間臭さは、その後を慕う私たちの心と共通し、それ故に、何の無理もなく側に接する者の心に沁みている。

630 いつかわれ昔の人と言はるべき

かさなる年をおくりむかへて

西行の秋と冬の歌の幾らかを選んで、その鑑賞を試みてきたが、今回は、この歌をもつて記述の最後としたい。

歌そのものが、一つのしめくりを為すのに、まことに適したもとなっている。

おとしが過ぎ、去年が過ぎ、今年もまた過ぎてゆく。来ては去り、去ってはまたやってくる年々を送り迎えするうちに、自ずとわが命は縮まっていく。「いつか」と言っても、そう遠い先のことではない。そのうち、この私も亦、「昔の人」と呼ばれるに違いない。

今は元気に生きている日々であつて、西行は、しっかりとわが身

の辿りつく先を見つめている。死に対する怖れなど、どこに見出しようもない歌である。

許される生の限りは有難く生きて、死に至り、時が流れたら、「昔の人」と呼ばれたらよいのだと、「われ」のことが、まるで、他人事のように歌われている。

「いつかわれ昔の人と言はるべき」―その内容も、調べも、何とおつとりとし、おだやかであることか。

様々なことを思い、願い、折々には、周辺の驚ろく激しい行為も取つてきた。十全とは言えないまでも、自分は自分なりに、一年また一年と、われならではの歳を重ねてきたのだ。死んで昔の人となる、それは当たり前のことであり、その当たり前の人生に、私は、ゆつたりと身を任せることができる。

そうした西行の「生」が、この歌には単純にして明瞭に歌われている。

一読して途端にその意の分かる歌を、ゆるやかに流れる川面に身を浮かべるがごとき思いで見つめていると、「われもまたかくありたし」との思いが、じわじわと高まってくる。西行のごとくに、願った季節の、願った状況のもとで死に至るほどに恵まれなくともよい。しかし、許されるものなら、この歌の、このおだやかさをわが心として、自分もまた終焉の時を迎えたいと思えてくるのである。

西行は、夢多き人であつたが、思えば、西行は、夢売り人でもあつたのだ。

あとがき

「西行考 その三」を書き終えると同時に、つと胸を過つたものは、「名作の条件とは何か」という自問であつた。

そして、自答は、「長文の作品であれ、短詩型文学であれ、多くの人々に親しまれ、感動を生む、それが諸条件の中の特に必須のものではないか」というものであつた。

ごく限られた者に理解のいく名作もないわけではない。例えば、『ツアラトウストラはかく語りき』は、高校生の私にとってはまだこゝとに難解であつた。しかし、理解が困難であつても、この作品が名著の一つであることは間違いない。

だが、『徒然草』や『方丈記』、あるいは、井原西鶴が生み出したものや近松門左衛門の諸作品、そしてまた、万葉集の歌や芭蕉の俳文、俳諧が、名作であり、傑作であるのは、それらが、数限りない人々に読まれ、親しまれてきた文学であるからだ。

西行は、西行を慕つてやまない膨大な人々を生んできた。そして、それは、西行の歌が、よく分かる歌であるからだ。限定された人間でなく、誰もが西行の歌には、理解を深くし、思いを共にしながら、これを味わうことができる。

西行と「寅さん」を結びつけると、それは一体何事だと叱責されるかもしれないが、「寅さん」を世に出した映画監督の山田洋次氏は、「寅さんはね、わかりやすすくないといけないのですよ」と語つたという。

「寅さん」は、映画を通して世の人々に安らぎを与えてくれたが、西行は、和歌を通して、多くの日本人に安堵の感を与え続けてくれている。そして、その共通項は、無理なく自然と溶け込んでいける

分かりやすさにあると言えないか。

「西行考 その三」を記しながら、ずっと胸の中に在り続けた思ひである。

主要参考文献

- 久保田淳編『西行全集』貴重本刊行会
- 渡辺 保著『西行山家集全注解』風間書房
- 安田章生著『西行』彌生書房
- 桑原博史著『西行とその周辺』風間書房
- 目崎徳衛著『西行の思想史的研究』吉川弘文館
- 山本幸一著『西行和歌の形成と変容』明治書院
- 佐々木克衛著『中世歌論の世界』双文社出版
- 辻邦生著『西行花伝』新潮社
- 白州正子著『西行』新潮社